

チェンジ 政権交代をチャンスに！ 家族も働き方もデフォルト・チェンジへ

アメリカに続いて日本でもチェンジ、世の中のデフォルト(初期設定値)のチェンジです。これまでの常識がこれからの非常識になるかもしれませんが、それにビビって後戻りしても未来はありません。しっかりチェンジの先の暮らしづくりに向かいたいものです。

「標準世帯」って、ホントに標準？

さまざまなチェンジが予想されますが、注目すべきものに「家族」と「働き方」があると思います。これまで戦後社会の家族のデフォルトは、夫婦と子ども2人で構成され、仕事に就いているのは世帯主1人という4人家族でした。しかしいまや、こういう家族を「標準世帯」と呼ぶと、「ウチの家族って、標準じゃなかったんだあ」と意外に感じる若い家族は多いことでしょう。

世帯主(多くの場合に夫)が工業を中心とした仕事場で一生懸命働き、その稼ぎで、家事、育児、介護などを家事として専業主婦の妻が担う。稼ぎ手は安心して仕事に励み、収入を増やして定年まで勤め上げる。そして、子どもが老後の面倒を看てくれる。そんな豊かさをモデルに、社会のしくみ、会社のしくみも整備されてきたわけです。

しかし、世の中は変わりました。サービス産業の時代です。大学進学率は50%を超え、男子より女子のほうが高い現状です。一方、右肩上がりの経済成長が見込めなくなり、片働き家族でこれまでと同じ豊かさを確保するのは難しくなりました。

現実には共働き家族のほうが多いのに、社会のデフォルトは片働き家族のまま。そのねじれから、ワーク・ライフ・バランスという言葉も注目されるようになったわけですが、どうやら今回のチェンジは、家族のデフォルトを変えそうです。

「役割補完夫婦」が標準になると

これまでの標準世帯では、ワーク・ライフ・バランスは、「ワーク担当の夫」と「ライフ担当の妻」、夫婦それぞれに分担された役割を果たして家族のバランスを保つものでした。

しかし、これから「共働き、共育て家族」に標準がチェンジすると、「役割分担夫婦」から、「役割補完夫婦」へのチェンジが必要になります。いざとなったら「男は仕事、女は家庭」というデフォルトに戻っていたこれまでに決別し、「男も女も、仕事も家



庭も」を基本とした、社会や暮らし、生き方のリデザインが始まります。

それは、若い「家族」たちにとっては朗報です。問題は、これまでのデフォルトにドブプリ浸かってきた私たち中高年夫婦(特に夫)と、その価値観に頼ってきた会社組織やマネジメントです。個人も会社も社会も、新たなデフォルトに乗り移る勇気とジャンプ力が求められます。

おかしいことが、おかしく見える

デフォルトをチェンジさせて世の中を眺めると、やむを得ないと思っていたことも、問題として見えてきます。いま、新型インフルエンザへの心配が高まっていますが、病児保育という育児の問題がそこに潜んでいます。

知らない人も多いようですが、普通の保育園では、発熱や体調に異変があると

預かってくれません。保育園に子どもを預けて仕事に出ている母親がもっとも恐れていることは、「熱が出ています。すぐに引き取りをお願いします」という保育園からの電話だそうです。

こういう場合、病児保育施設に預けるか、親か身内が看病するしかありません。しかし病児保育施設は不足しており、インフルエンザの季節には、いつも空きはありません。「風邪をひくなら、早いもの勝ち!」という声さえ共働き家族の母親からは聞かれました。なんだか、本末転倒です。

だからといって、父親が会社を休んで子どもの看病をすることへの上司や職場の理解は、まだ十分とは言えないようです。これまでのデフォルトでは、非常時の対応

まで行き届かなかったのです。


デフォルト・チェンジを追い風に

もちろん、病児保育だけでなく、一般の保育所も不足状態が続いています。先日の厚生労働省の発表では、待機児童数は前年比3割増とのことでした。

また、育児だけでなく介護の面でも同様でしょう。だからこそ、「共働き、共育て家族」へのデフォルト・チェンジに期待がかかります。新しいデフォルトから生まれる新しい時代の風は、新しい生き方、働き方にも追い風になるはず。 「男たちのワーク・ライフ・バランス? それどころじゃねえよ」なんて言ってないで、老いも若きも未来への風にのりましょう。

(なかま・しんいち)

※この連載は、ヒューマンリソース研究所の中間真一主席研究員と鷲尾梓研究員が交互に執筆します



中間 真一 株式会社ヒューマンリソース研究所 主席研究員

1959年生まれ。慶應義塾大学工学部管理工学科卒業後、富士写真フイルムを経て現職。オムロングループのシンクタンクとして、学ぶ、働く、暮らすという切り口をもとに、生活実感を大事にしつつ、生き方、社会、技術の今そして近未来を探る。共著書に『スウェーデン—自律社会を生きるひとびと』(早稲田大学出版部)、『男たちのワーク・ライフ・バランス』(幻冬舎ルネッサンス)。